**様式Ｃ－１９**

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 22 日現在

**機関番号：37302**
**研究種目：基盤研究（B）**
**研究期間：2008 年度～2011 年度**
**課題番号：２０３２０１２５**
**研究課題名（和文）　キリシタン墓碑の調査研究－その源流と型式分類のための再調査－**

**研究課題名（英文）　A Study of Kirishitan Tomb: The Origin of Japanese Christian Tomb and re-examination for its classification**

**研究代表者　片岡　瑠美子（Kataoka Rumiko）**
**長崎純心大学・人文学部・教授**
**研究者番号：２０１８５７９７**

研究成果の概要（和文）：
片岡弥吉の論文「長崎県下キリシタン墓碑総覧」（1942 年）と「キリシタン墓碑の源流と墓碑型式分類」（1976 年）を基礎として国内及び海外の調査を行った。国内 115 か所の墓地・墓碑調査、海外では 18 か所の博物館及び墓地での調査を行うことが出来た。その結果、国内の墓碑について、キリシタン墓碑の概念、その特徴と定義、意義、型式をまとめることができた。海外調査では、ローマ、スペイン、ポルトガルでの調査から、エトルスキの墓地や墓碑を源流とするローマ式墓碑がポルトガルに伝えられ、キリスト教宣教師の世界布教の過程で日本を含む世界の各地に広がったことを確認できた。

研究成果の概要（英文）：
An investigative study was made overseas and within Japan of Kirishitann tomb using the 1942 paper byYakichi Kataoka, “Nagasaki-kenkaKirishitanBohiSouran” (A Comprehensive Survey of Kirishitan Tomb in Nagasaki Prefecture), and the 1976 paper by the same author, “Kirishitan Bohi no Genyrū to Bohi Keishiki Bunrui” (The Origin of Kirishitan Tomb and a Classification of Their Style). An investigative research study was made within Japan of 115 gravesites’ tomb and overseas at 18 sites, including museums as well as cemeteries. As a result, it became possible to organize the tomb’ concept, special characteristics, meaning and style.
The overseas investigative research in Rome, Spain and Portugal showed that the style found in Rome, which originated in the Etruscan gravesites and the tomb, spread to Portugal. Thus, confirming the Christian missionaries spread this style all over the world, including Japan, through their missionary activity.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2008 年度 | 6,300,000 | 1,890,000 | 8,190,000 |
| 2009 年度 | 4,500,000 | 1,350,000 | 5,850,000 |
| 2010 年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2011 年度 | 1,700,000 | 510,000 | 2,210,000 |
| 総　計 | 13,100,000 | 3,930,000 | 17.030,000 |

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：歴史考古学　キリシタン史　キリシタン墓碑

１．研究開始当初の背景

（１）キリスト教伝来とともに、16.17 世紀にキリスト教による葬祭儀礼が行なわれた。1580 年に定められた『日本布教長内規』第 19 章「死者の埋葬と葬儀」では、「日本人は死者の埋葬を極めて大切にするので、万人を深く感動させ、死者の地位に応じて相応しい盛儀で行うよう努めること」と指示されている。

大きな十字架を建てたキリシタンのための墓地が、長崎県では平戸に 1555 年、大分県では府内に 1556 年につくられたことが宣教師の記録の中にある。近年、高槻、東京駅八重洲北口、豊後府内、臼杵市野津町の遺跡などの発掘調査から、史料に記されている教会に付属、或いはその近くに教会墓地が造られたことが考古学的にも明らかとなってきた。

それらの墓地には、それまでの仏教式石塔とは異なったヨーロッパのキリスト教墓碑、いわゆるキリシタン墓碑が見られるようになったと考えられる。

江戸時代、特に教会が発展した地域を中心に徹底した墓破壊が行われたにもかかわらず、キリシタン墓碑は、京都府、高槻市、大分県、長崎県など、キリスト教布教が盛んであった地域に多く発見されている。また、江戸時代の長崎奉行所文書からも、「形変候墓石」の詮議が続けられていたことが分かっている。

手水鉢などに転用されていたもの、地下に埋もれていたものが、当時のキリシタン墓碑がどのようなものであったかを今に伝えている。従って、日本文化史上のキリシタン墓碑は、今日、日本にキリスト教が伝来してどのように受容され、また、禁教・鎖国によってどのように変形したかを知るために重要なものである。また、それらのキリシタン墓碑は、当時来日していたポルトガル、スペイン、イタリア出身の宣教師の指導でつくられたとすれば、それらの国に残存する 16 世紀以前の墓碑と比較することによって、その源流を明らかにすることができる。

（２）キリシタン墓碑の発見は、1902（明治 35）年、現在の南島原市有家町中須川で花十字紋入箱型の墓碑発見を最初とする。一方、京都においては、1917（大正 6）年延命寺境内で 3 基のキリシタン墓碑が発見され、以後、発掘調査や研究が進められた。

イエズス会宣教師の書簡や年度報告書などの史料に記されるところの墓地の存在が考古学的にも確認される一方、キリシタン遺物・墓碑が一般の関心を集めるに従い、単に浅彫りの十や×印があるものを史料との照合なしにキリシタン遺物とする傾向が多くなっている。また、キリシタン墓碑が観光資源として利用され、あるいは公園化や宅地化でこれまでに発見されたキリシタン墓碑の元の所在場所が分からない状況さえ生じている。また、石材の風化が激しく、銘文の判読が困難になっている墓碑が多く見受けられる。

従って、これまでに発見されたキリシタン墓碑を再調査し、キリシタン墓碑の判断基準を提示するとともに、キリシタン墓碑の説明板設置等を含む保存管理の対策を講ずることが急務である。

２．研究の目的

（１）すでに発見されているキリシタン墓碑の所在を確認し、その状況を再調査して今後の保存管理の手段を考える。

（２）16、7 世紀、我が国と交流をもった国々の墓地・墓碑を調査し、キリシタン墓碑の源流と型式分類を再確認し、墓碑の型式、記名等からキリシタン墓碑の判断基準を提示することを目指す。

３．研究の方法

４年間を通して、片岡弥吉稿「長崎県下キリシタン墓碑総覧」（1942 年）に記載されたキリシタン墓碑を再調査（場所・位置・現状を記録、遺構の・遺物の実測、測量、写真撮影）することを基本に、第 1 年次は、報告書等文書類、刊行された長崎県下のキリシタン墓碑に関する文献調査を主とし、第 2 年次に、その源流を明らかにするために、キリシタン時代の宣教師の郷里であるポルトガル、スペイン・イタリアの考古博物館、墓地を調査し、片岡弥吉稿「キリシタン墓碑の源流と墓碑型式分類」（1976 年）を基礎にその源流を再確認する調査を実施することとした。

第 3 年目には、現存する国内のキリシタン墓碑の所在、現状を確認する現地調査、実測に重きをおく。その際、1942 年の調査による記録・写真と比較し、保存等の問題を検討する。第 4 年次は報告書の作成作業の年とした。

４．研究成果

4 年間で国内では 20 回、延べ 115 の墓地・墓碑を調査することができた。しかし、1942 年発表の「長崎県下キリシタン墓碑総覧」所載の 116 基のうち 26 基の所在を確認できなかった。その調査は今後も続けていくこととするが、開発などで失われたものも多いと考えられる。

国外では 18 ヵ所の考古博物館及び墓地の調査を行なうことができ、当初予想以上の成

果を得ることができた。

（1）長崎県下のキリシタン墓碑の現状を把握し、先行研究を参考にキリシタン墓碑の定義、意義、型式をまとめ、調査報告書に掲載している。キリシタン墓碑は、本来、銘、紋を刻んだ立碑との組み合わせであった墓が弾圧下の墓破壊で本来の姿を失い、墓または墓石の代わりにモニュメントとしての性格を有するものとして墓碑の名称が用いられているので、その名称を継承している。

特に近年、単に十字の印があるだけでキリシタン遺物とする傾向があるため、キリシタン時代に用いられた十字紋を 16 種挙げている。単なる十字の印だけの場合は、伝承、由来、形状、近くのキリシタン墓碑との関連などと合わせて考察する必要があることを提言している。

① キリシタン墓碑の特徴として、禁教令以前の墓碑には十字紋、命日の年月日（西暦あるいは和暦）、命日が教会祝日に当たる場合は祝日の呼称、洗礼名が刻まれていることを特徴とする。
② キリシタン墓碑とは、十字紋、洗礼名（ローマ字、漢字、ひらがな）、ローマ字による人名表記、IHS、INRI、西暦、教会祝祭日などに限定される特有のキリシタン意匠を施した墓碑であること。
③ 基本的にはキリシタン墓碑特有の伏碑であること。これについては、ルイス・フロイスが 1585 年に肥前加津佐で執筆した『日欧文化比較』第 5 章において、「われわれの墓は細長い。彼らのは円状で樽半分ほどのものである」と指摘している。「細長い墓」とは、片岡弥吉の分類に従うと寝棺型伏碑になる。

但し、関西や長崎でいくつか確認される立碑も、その刻まれた意匠からキリシタン墓碑とする。また、長崎地方に存在する潜伏時代の無紋無表の野石墓碑も、その子孫によってキリシタンであったことが証明されて、キリシタン墓碑としての確実性が信じられるものを含んでいる。

（2）海外での調査の結果、キリシタン墓碑の源流がポルトガル、ローマ時代にあることを確認した。

伏碑については、半円頭型・半円柱型・樽型などを蒲鉾型と通称してきた。

樽型については 2009 年の実地調査においてポルトガル国リスボン市所在の国立考古学・人類博物館で確認することができた。その内の１基は、台付きで中央部が丸みを帯びた酒樽の形で、樽の締め金のタガを表すと思われる 4 本の帯状の線が見られ、中央部上段には碑文がある。

写真：リスボン国立考古学・人類学博物館

博物館学芸員の説明によると、樽型や半円型の墓石はポルトガルではアレンテージョやアルガルヴェ地方の特徴であるという。そしてこの形は、ローマ時代に死者が粘土製の両耳付壺（瓶）に納めて葬られている多くの証拠によってローマの影響を受けていると推測できるという。樽型キリシタン墓碑がリスボンの樽型墓碑の流れを汲むものとするならば、ポルトガル出身の宣教師によって墓碑情報がもたらされたと考えることができる。

伏碑の中の寝棺型あるいは蓋石は、一般にはアーチ型と称するものであって、ローマ墓碑と言われるものの典型的な一つの型である。リスボンの国立考古学・人類学博物館のほか、カルモ修道院跡考古学博物館、シントラ市オドリィニャス考古学博物館、トルレス・ヴェドラ市立博物館、ブラガ市立博物館、バルセロス博物館などに見ることができる。特に、2009 年に訪れたオドリィニャスの考古学博物館には、圧倒的な数のアーチ式ローマ墓碑が展示されている。ローマ帝政時代の墓碑も含め、１～２世紀の墓碑が多い。シントラ地方で特に多く出土しているが、同地はポルトガルではローマ世界の最盛地の一つとされる。材質は当地方で産出される石灰岩であり、大理石に近い素材も使用されているという。

写真：報告書 26 頁
オドリィニャス考古学博物館　図版IV

カルモ考古学博物館にあるアーチ（半円）型墓碑は、説明によると紀元前１世紀から紀元２世紀のものであり、材質は石灰岩である。台座のない１基は（図版VI）は高さ 50 ㎝、長さ 108 ㎝、口径 49 ㎝である。これは、南島原市西有家町須川名松原の共同墓地にある国指定史跡キリシタン墓碑（高さ 38 ㎝、長さ 120 ㎝、口径 56 ㎝）とほぼ同型である。

写真：報告書 27 頁
カルモ考古学博物館図版Ⅶ

写真：報告書 129 頁
須川名松原の共同墓地にあるキリシタン墓碑（国指定史跡 1959 年）

このように、ポルトガルに現存する墓石・墓碑がローマ時代にローマから伝えられたことは、ポルトガルの研究者や博物館学芸員の発言からも裏付けられる。

ローマ式墓碑については、ローマのダ・ヴィンチ空港から約３㎞ のところにあるローマ古代の多様な形式の墓からなるネクロポリスをもつイゾラ・サクラ、オスティア・アンティカ、サン・カリストのカタコンベに見られる、アーチ型壁龕の墓が、スペイン国セビリャ市のカルモナのネクロポリスに数多くあるアーチ型壁龕に対応するようである。

オスティア・アンティカの墓地では、平蓋石型墓碑を確認することができた。平蓋石型墓碑は日本のキリシタン墓碑の中に多数現存するものである。同じ平蓋石型墓碑がシントラ市オドリィニャス考古学博物館にもある。

ローマ式墓碑に属する切妻寝棺型は、イゾラ・サクラにも事例があり、リスボンのカルモ考古学博物館やトルレス・ヴェドラス博物館でも確認された。

写真：カルモ修道院跡博物館

写真：報告書 191 頁
南島原市布津町大崎宮の本共同墓地

イタリアのパヴィア大学の構内にはローマ帝政時代のものと思われる切妻蓋石がある。これと類似したフィレンツェ考古学博物館の切妻蓋石付石棺には、人物が色鮮やかに描かれている。これは紀元前４世紀半ばころにエトルリアのタルキニアから出土したものであるが、ローマ時代の肖像芸術は、そのもっとも原初的な側面がエトルスキの彫刻に由来しており、それは、エトルスキの建築において顕著で、建造物のアーチやヴォルト（丸天井、丸屋根）の形が墓や墓碑にも反映・影響している。いわゆる、ローマ式墓碑と称されるものの源流がエトルスキの墓地や墓碑にあることは否定できないし、さらに、ギリシャおよび小アジア、オリエントにまでその源流を遡ることができることも確認できた。

このような源流をもつローマ式墓碑がポルトガルに伝えられ、さらにキリスト教の世界宣教の過程で世界各地に伝えられたことは、墓碑研究が歴史の大きな流れの中で理解されるべきであると教えている。

また、ローマのヴィラ・ジュリア博物館に展示されている正倉院の校倉造りを小型化した青銅製の小屋の骨壺は、紀元前７世紀半ばのものとされるが、神明造りで千木が両端の屋蓋を貫通して高くそびえるだけでなく、さらに３個の千木が屋根の上に等間隔に見られる。日本の古墳からこのような家型埴輪が多く出土していることを考えると、東洋と西洋とがまったくかけ離れた世界でないことを語っていると実感した現地調査であった。

（３）特に長崎県内のキリシタン墓碑を特長づける花十字紋は、ポルトガル・ローマの墓碑に見ることができなかった。その理由として石灰岩を材質とするため、長い年月に消滅したとも推測できるが、或いは使用されていなかったと思われる。

そうであれば、墓碑を飾る花十字紋を刻むことは、日本の独自のキリシタン墓碑の特長であると考えることが出来るのではないか。

今後の研究課題とする。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）
① 下川達彌　「「鎮め堂」はキリシタン墓碑か」『萩市福栄地域における隠れキリシタン洞　事業報告書』2-14 頁、2011 年
② 下川達彌「キリシタンの遺物・遺跡研究について－一つの提言－」『長崎県考古学会報 18』4-5 頁、2010 年
③ 下川達彌「キリシタン墓碑巡り－おろくさんの墓とおろくにん様について」『長崎学研究』第 13 号 7-11 頁、2010 年、査読：無
④ 下川達彌「キリシタン遺跡・遺物の検討（覚書）」『長崎学研究』第 12 号 10-11 頁、2009 年、査読：無
⑤ 下川達彌「キリシタン墓碑の研究に向けて」『長崎学研究』第 11 号 6-7 頁、2008 年、査読：無

〔学会発表〕（計 6 件）
① 五野井隆史「葬礼と墓地に関する覚書－16 世紀、キリシタン資料に見られる記載を中心に－」『第 31 回長崎学一般公開講座』2011 年
② 下川達彌「キリシタン墓碑の源流を訪ねて」『第 36 回純心博物館講座』2010 年
③ 五野井隆史「江戸初期におけるキリシタン墓と宣教師の活動について」『長崎県考古学会』2010 年
④ 下川達彌「ヨーロッパにおけるキリスト教墓地の事情」『長崎県考古学会』2010 年
⑤ 下川達彌「潜伏期からのキリシタン墓碑」『キリシタン文化研究会』2009 年
⑥ 下川達彌「長崎県内のキリシタン墓碑－禁教から現代までの推移」『第 33 回純心博物館講座』2008 年

６．研究組織
(1)研究代表者
片岡　瑠美子（Kataoka Rumiko）
長崎純心大学人文学部教授
研究者番号：20185797

(2)研究分担者
下川　達彌（Shimokawa Tatsuya）
活水女子大学文学部教授
研究者番号：30389530

研究分担者
片岡　千鶴子（Kataoka Chizuko）
長崎純心大学人文学部教授
研究者番号：50123831

研究分担者
五野井　隆史（Gonoi Takashi）
聖トマス大学文学部教授
研究者番号：70013282